様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３３９４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２５９４

研究課題名（和文）「チーム学校」の実現をめざすアクションリサーチ―学校教育版TPEの試み―

研究課題名（英文）Action research for realization of "Team school": attempt TPE for school education

研究代表者
肥田　武（Hida, Takeshi）

一宮研伸大学・看護学部・講師

研究者番号：３０７７４９５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は「チームとしての学校」（文科省2015）の理念に共感し、実現を目指すアクションリサーチであった。方法として医学教育で成果を得ている教育プログラム「専門職間連携教育 = IPE（専門職を超えた連携教育 = TPE）」の学校教育版を開発・実施し、効果検証と課題探索を行った。
成果として、学校教育版IPE（TPE）の基礎となる多元的視点を特長とするシナリオ（架空の不登校生徒と母親を題材とする）の作成、シミュレーション教育における学習体験の質を向上するボランティア演者の養成、オンラインで実施可能なプログラムの開発、参加した複数専門職の間の相互作用の分析、各職種固有の学びの特徴の分析を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　チーム学校では、学校教育における「負担軽減」と「質の向上」という両側面が重視されている。
　前者について昨今では、それがもたらす直接的貢献の大きさから、DXや働き方改革等の議論が中心となり、チーム学校への関心は薄れた感があるものの、この動きが一巡した後、あらためて後者が俎上に載ると推測され、チーム学校の理念はなおも重要な意義をもつ。
　チーム学校の実現のためにIPE（TPE）は有効な手立であり、本研究で得た、シナリオ作成やボランティア演者養成、プログラム開発に関する知見は即時的に役に立つ。また他の専門職との関わりが、教師に自らの専門性の問い直しと向上希求の機会を与える点は示唆的である。

研究成果の概要（英文）：This study was action research that sympathized with and aimed to realize the idea of "school as a team" (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology 2015). As a method, we developed and implemented a school education version of the educational program "Interprofessional Education = IPE (Transprofessional Education = TPE)" that has proven successful in medical education, and verified its effectiveness and explored issues.
As a result, we created a scenario (based on a fictional school-refusing student and his mother) that features a multi-perspective that forms the basis of the school education version of IPE (TPE), trained volunteer actors to improve the quality of the learning experience in simulation education, developed a program that can be implemented online, analyzed the interactions between the multiple professionals who participated, and analyzed the unique learning characteristics of each profession.

研究分野：教育学、質的研究

キーワード：チームとしての学校　チーム学校　専門職間連携教育　IPE　アクションリサーチ　教師教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)　理念「チームとしての学校」の提唱

日本の学校教育の閉鎖性・同質性[1]は、教師の権威を維持し満足度を高める一方で、① 教師のバーンアウト[2]、② 児童・生徒のいじめ問題[3]、③ 学校教育における科学的根拠の排除[4] 等の弊害をもたらしうる。

このような背景をふまえ、文部科学省は 2015 年に「チームとしての学校（チーム学校）」という理念を提唱した。これは教職以外の多様な専門スタッフの配置によって、学校を機能的に再構築し、① 多忙な教職が本来業務に専念する時間の創出、② 子どもの複雑化する課題への首尾よき対応、③ 新たな教育課題に相応しい授業方法の革新[5]等を目指すものであった。

(2)　医学教育における Interprofessional Education（IPE）の隆盛

いっぽう医療分野では超高齢多死社会の到来による「病院中心」から「地域中心」への移行に際し、それを知識・技術両面で支える「チーム医療」が先んじて提唱されていた[6]。医学教育における「Interprofessional Education（IPE）= 専門職間連携教育」、「Transprofessional Education（TPE）= 専門職を超えた連携教育」の実践は、それを実現する有効な手立てとなっていた。

本研究は(1)の理念に共感し、その実現を目指して、(2)の IPE（TPE）の学校教育版を開発・実践しようと着想した。

２．研究の目的

本研究の大目的は長期的視野でチーム学校の実現に貢献することであったが、短期的視野での具体的な小目的として以下の 2 点を掲げた。

(1)　チーム学校をいかにして実現できるかの検討

上述の IPE（TPE）の学校教育版があれば、チーム学校の実現に貢献するだろうと見込み、それを開発・実践し、理念の実現に向けた効果と課題を具体的に検討しようと考えた。

(2)　チーム学校は既存の学校をいかに転換しうるかの検討

プログラム実践における専門職間の関わりをとおして、各専門職がどのように感じ、考え、変容するかを捉えることにより、チーム学校が既存の学校をいかに転換しうるかを検討しようと考えた。

３．研究の方法

(1)　アクション・リサーチ

本研究はパラダイムとしてアクション・リサーチを採用した。これは実践と科学とを結びつける研究を指し、実践家と研究者とが積極的に関わって協力することにより、強固な関係性に支えられるからこその、地に足の着いた実践の改善と、より豊かな科学的知見の獲得を共に実現できる枠組みである[7]。上述の本研究の目的には実践性が強く伴うため、この枠組みが適していると考えた。

また研究者 2 名はいずれも中学校・高等学校の教職経験者であったため、予めもつ、現場との人脈や信頼関係を活かすことにより、この枠組みに基づく研究を充分に遂行可能であるとも考えた。

しかし実際には序盤は支障なく進められたが、後の新型コロナウイルス感染症の蔓延をきっかけに、密な協力は難しくなってしまった（後述）。

(2)　シナリオの開発

安全性・質管理・経済性・学習の能動性等の観点から、医学教育にはシミュレーション教育が根付いており[8]、IPE（TPE）も例に漏れない。定められた架空の事例に沿って、複数の専門職が連携を経験的に学ぶためには、基礎題材となるシナリオが必要である。またこれは現場でよく経験される事実や感覚にそぐうものでなければならない。

そこで本研究では学校教育の文脈で専門職間の連携による支援が期待されるシナリオ（架空の不登校生徒と家族の事例）を研究者 2 名で協働作成した後、国内の学校で実体験を豊かに重ねてきた専門家である、教師 2 名、スクールカウンセラー2 名、スクールソーシャルワーカー1 名（いずれも 50 代のベテランにあたる）に個別に読んでいただき、意見を求めた。また同様に大学生 2 名には生徒の視点からの意見を求めた。それらの意見に基づいて検討・修正を重ね、シナリオを完成させた。

(3)　ボランティア演者の養成

次に、完成したシナリオに基づいて、架空の不登校生徒役と、その母親役を務めるボランティア演者を募集した。応募のあった演劇に関心の高い大学生 2 名を採用し、シナリオを読み込んでもらった。その後 4 回にわたり、研究者との打合せの機会を設け、意見交換と設定調整をおこない、様々な会話に自然に対応できるようになるまで、演技の練習を繰り返した。

なお医学教育の IPE（TPE）におけるシミュレーションにはペーパーペイシェントが採用される（シナリオ自体がそのまま配布され、紙面上の内容を複数の専門職で読解する）場合と、模擬患者が採用される（シナリオは配布されずに、それを演じるボランティアとのやりとりをとおして複数の専門職が情報収集する）場合とがある。本研究における学校教育版の IPE（TPE）では､認知･思考だけでなくコミュニケーション等についても経験的に学べる後者の方略に準じた。

(4)　プログラムの開発

実施可能性を高めるために全体を 1 日で完了できること、また IPE（TPE）のねらいである専門職間連携の経験的学びを促進するために複数専門職が実際に関わり合えることを前提とし、集まった複数専門職が、① 対象となる架空の不登校生徒と母親の基本情報を知って要点を確認するパート、② 職種毎に順にボランティア演者と対面して詳細情報を収集していくパート、③ 得られた情報を持ち寄って複数専門職で対象の理解を深め支援策を検討するパートからなる学校教育版の IPE（TPE）プログラムを開発した。

ただしその後に新型コロナウイルス感染症が流行し、想定していた対面でのプログラム実施が難しくなったため、これをさらにオンライン化することで対処した。臨場感を高めるための動画教材を制作し、ボランティア演者への情報収集や複数専門職でのディスカッション等をオンラインで行える環境を構築した。

(5)　プログラムの実践

医学教育における IPE（TPE）は医療職を志す養成段階の学生を対象とする「卒前教育」と、既に医療職に就いて日々の職務を遂行する現職を対象とする｢卒後教育｣の双方が行われており、全体としてチーム医療の実現や質の向上に貢献してきた。

本研究でもこれに倣って、学校関連職を志す学生と、既に学校関連職に就いて活躍する現職の双方でプログラムを実施しようと考えた。

しかし実際には新型コロナウイルス感染症の蔓延により、現場である学校は感染症対策や授業のオンライン化等、従来経験されたことのなかった大きな変化を伴う対応に追われ、多忙をますます極めることになった。またそれをきっかけとして会議や部活動等のあり方等、働き方の見直しへの現場の関心が高まり、各学校での具体的検討が始まって、他の事に手が回りにくい状況となっていた。したがって本来業務でない本研究への協力は得がたくなり、プログラムの実施は現職に対してはできず、学生に対してのみ実施した。

(6)　データ採取

IPE（TPE）プログラムを実施し、プログラム内での、職種毎のボランティア演者に対する情報収集の様子と、専門職間のディスカッションの様子を録音・逐語録化した。

またプログラム実施後に、各職種に対して体験を振り返る内容の半構造化インタビューを実施して録音・逐語録化した。

(7)　データ分析

得られたデータを質的データ分析手法である Steps for Coding and Theorization（SCAT）[9] を用いて分析した。

４．研究成果

(1)　シナリオ

豊かな経験をもつ複数の専門家と議論を繰り返し、視点に多元性を生むことが重要であるという考えから、あえて 3 種類に分けたシナリオを完成させた。概要は以下である。

表 1　シナリオの構成

シナリオ名	内容
①担任教師から見たマモル ※ 担任教師の視点	生年月日・性別・成績・部活動・性格・家庭・経過・学級での様子・小学校からの申し送り事項・地域の特色・Q&A
②マモルのライフストーリー ※ 不登校生徒本人の視点	幼少期（父との離別）・小学校（友人関係・病・母への反発）不登校時の自宅での過ごし方・Q&A
③母のライフストーリーと母から見たマモル ※ 母の視点	経過（妊娠・夫との離婚・夫の逮捕・仕事・マモルとの関係）・マモルの変化への認識・その他・Q&A

なおボランティア演者は上記のすべてを読み込み、多様な角度からの質問等に応じて自然に

演じられるようになるまで練習した。
　単一のシナリオではなく、観点の異なる3つのシナリオとしたことで、ストーリーの伏線に立体感が生まれ、IPE（TPE）に参加する複数の専門職それぞれの専門性を活用した広い解釈の可能性を担保できた[10]。

(2)　プログラム
　プログラムは対面実施を前提として当初作成したが、感染症蔓延の状況に対応しながら実施可能性を確保するため、最終的にオンライン化することとなった。このプログラムは現職と学生の双方に適応可能であるものの、実際には後者のみに実施した。
　学校関連職を目指す学生として、教育学生と心理学生と看護学生の参加を募ったが、プログラム概要は以下のとおりとなる[10]。
① 事前の学習
　動画「チーム学校とは」の視聴
② 当日の学習

表 2　当日の日程（例）　※ オンラインで実施

時刻	教育学生	心理学生	看護学生	ルーム
10:00-10:03 10:03-10:15 10:23-10:35 10:35-10:46	挨拶 動画「オリエンテーション」（研究説明、事前アンケート） 自己紹介 動画「課題提示」			A
10:55-11:15	面談 1（マモル）	面談 2（母）		B C
11:20-11:40		面談 3（マモル）	面談 4（母）	B C
11:45-12:05	面談 5（母）		面談 6（マモル）	B C
13:05-14:05 14:10-14:30 14:35-14:40	支援計画の協働作成（Google ドキュメント利用） 支援計画の発表 挨拶、事後アンケート			A

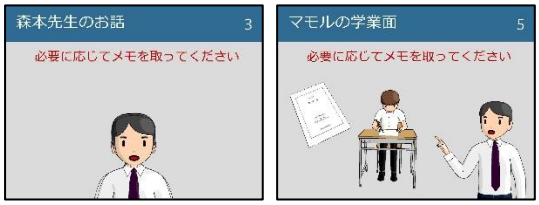

図 1　動画「課題提示」の一部

　10:36-10:46 の動画では担任教師が、架空の不登校生徒であるマモルと母親について自身の把握できている範囲の情報を説明していく。
　その後の 10:55-12:05 には職種毎にボランティア演者と個別面談を行い、職種の専門的観点を活かして、さらに詳細な情報を収集していく。

③ 事後のインタビュー
　聴き手の質問に対する振り返りながらの語り（他職種と関わりながら感じたこと・考えたこと）

　以上のプログラムは、ボランティア演者との面談をとおした情報収集を含むことが特長であり、顔の見えない紙面でのシミュレーション教育ではなく、顔と顔とを突き合わせての血の通ったシミュレーション教育として学習体験の質を向上させることができた[10]。

(3)　データ分析（専門職間のコミュニケーションの特徴）
　プログラム実施中には、IPE（TPE）ならではの、専門職間の相互作用が観察された。特に典型的な場面として、支援計画の立案では専門職間で「目標設定に関する葛藤」が生じること、また話し合いはその解消に向けて展開されることが解釈的に明らかになった。まとめられる支援計画では、「学習に関する目標の設定の保留」や「登校促進のための働きかけの保留」と、それと対をなしながらの「生活習慣に関する目標の詳細な設定」や「関係性構築に関する目標の詳細な設定」が特徴となっていた。これには教師以外の専門職の意見の反映が明確に示されていた[10]。

　なお以上の内容も含む相互作用過程の詳細な分析を論文として現状では公表できていないため、早急な実現を目指し、でき次第、研究成果発表報告書（F-24）にて報告したい。

(4)　データ分析（複数専門職固有の学びの特徴）
　事後インタビューからは、専門職間の関わりをとおして各職種に生じた違和感や驚き、変容等が解釈できた。授業そのものではなく不登校等の生活支援的内容に関しては、他の職種の専門性が教師よりも高いため、特に大きな影響を受けて「内面の揺れ動きの活性化」が見られるのは教師であった。教師は「勇み足としてのリーダーシップの空振り」をまず経験し、やがて「子ども

を支える専門性の不足の自覚」・「子どもを支える専門性のずれの自覚」を得ながら、「他職種へのやむなき傾聴」と「他職種へのリスペクト」へと至る。また「調整役しかできない不甲斐なさ」を抱えながら「自職種の専門性向上への反省的希求」ももつ。

なお以上の内容も含む各職種に生じる内面的意味の詳細な分析を論文として現状では公表できていないため、早急な実現を目指し、でき次第、研究成果発表報告書（F-24）にて報告したい。

(5)　考察（チーム学校をいかにして実現できるかの検討）

新型コロナウイルス感染症をきっかけとして、デジタルトランスフォーメーションや働き方改革等に現場の関心の焦点の第 1 義が移行していく流れが生じたと考えられる。実際に業務の精選や効率化が進みつつある。また少子化による児童・生徒人口の減少も明白に意識化され、限度を超えるような教師の多忙さについて緩和されてきている。そのため、チーム学校への関心が現在では薄れてしまった感は否めない。教師の「負担軽減」という側面について、チーム学校よりも、DX や働き方改革の議論のほうが直接的な貢献が大きいと感じられるためであろう。

しかしチーム学校では「負担軽減」だけでなく「質の向上」という側面も重視されており、チーム医療の存在意義に鑑みても、後者こそが本分であると考えられる。現在の DX や働き方改革による議論が一段落したとき、「負担軽減」の次の「質の向上」の局面として、チーム学校の理念の重要性があらためて高まることも想像される。

その時、学校教育版の IPE（TPE）は理念実現のための有力な手立ての 1 つであり、継続的な実践と効果検証の蓄積が期待される。

(6)　考察（チーム学校は既存の学校をいかに転換しうるかの検討）

外部と一定の距離があることによって自らの秩序を維持できている、閉鎖的な性質が学校教育には事実としてある。そのような場では、自らの実践において、内容によっては必要であるはずの科学的根拠が薄弱であるかもしれない可能性について、教師が反省的に気づく機会が生じにくかったとも考えられる。

それに対して、チーム学校の理念が健全に機能するようになるなら、教師は他の専門職と正面から関わり、それぞれの職種で重視されている観点に基づいた異見を交換することになる。ここでふれる外部の職種が根拠とする認識や技術や信念は、教師を助けるだけでなく、新たに必要となる学びに気づかせ、導き、自職種の専門性の問い直しや、職業アイデンティティの発展的な展開にまで繋がっていく可能性を秘めていると考えられる。

それこそは IPE（TPE）がもたらしうる学校教育の「質の向上」であると言うことができ、子どもたちが得られる利益を大きくすると考えられる。

５．その他

本研究は当初の計画に比して、限界のあるものとなってしまった。成果として得られたシナリオやプログラムは今後も活用可能であり、実践・検証と改善を継続していきたい。

また公表を目指している複数の論文について、早急に実現する努力をし、その際には研究成果発表報告書（F-24）にて報告する。

なおプログラムを対面ではなくオンラインの実施に変更したことや、現職への実施を断念して学生のみとしたこと等により、費用の使用を大幅に縮小し、残高を返却した。

＜引用文献＞

番号１　久冨 善之、教員文化の社会学的研究、1988、174-175
番号２　久冨 善之、日本の教員文化: その社会学的研究、1994、258-260
番号３　内藤 朝雄、いじめの構造: なぜ人が怪物になるのか、2009、164-169
番号４　内田 良、教育という病: 子どもと先生を苦しめる「教育リスク」、2015、18-22
番号 5　文部科学省、チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）（中教審第 185 号）、2015
番号６　安井 浩樹、医薬看クロスオーバー演習: チーム医療の現状と問題点、そしてその未来、2013、4-11
番号 7　グリーンウッド、レヴィン、アクション・リサーチによる大学と社会の関係の再構築、デンジン、リンカン、質的研究ハンドブック 1 巻: 質的研究のパラダイムと眺望、平山満義監訳、2006、63-85
番号８　日本医学教育学会教材開発・SP 小委員会、シミュレーション医学教育入門、2011、3-8
番号９　大谷 尚、質的研究の考え方: 研究方法論から SCAT による分析まで、2019
番号 10　肥田 武、三品 陽平、「チーム学校」の実現を目指すアクションリサーチ: 学校教育版 IPE の試み（これまでの成果）、日本教師教育学会第 31 回研究大会、2021

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 肥田武、三品陽平
２．発表標題 「チーム学校」の実現を目指すアクションリサーチ―学校教育版IPEの試み―（これまでの成果）
３．学会等名 日本教師教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 肥田武、三品陽平
２．発表標題 「チーム学校」の実現をめざすアクションリサーチ――学校教育版TPE/IPEの試み――
３．学会等名 日本教師教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 肥田武、三品陽平
２．発表標題 「チーム学校」の実現をめざすアクションリサーチ――学校教育版TPE/IPEの試み――（第2報）
３．学会等名 実践研究 福井ラウンドテーブル
４．発表年 2019年

１．発表者名 肥田武、三品陽平
２．発表標題 「チーム学校」の実現をめざすアクションリサーチ――学校教育版IPE/TPEの試み――（第1報）
３．学会等名 福井ラウンドテーブル
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 斎藤義雄、五十嵐淳子、内山仁、鎌倉博、菊池真貴子、鈴木和正、田口賢太郎、田中卓也、冨澤美千子、萩原真美、肥田武、三品陽平、森久佳	４．発行年 2020年
２．出版社 大学図書出版	５．総ページ数 208
３．書名 教職概論：理想の教師像を求めて（担当：第14章 チームとしての学校）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

新型コロナウイルス感染症蔓延への対応として、本研究中で遂行する、IPE（TPE）プログラムを対面ではなくオンラインでの実施に変更したことや、現職への実施を断念して学生のみとしたこと等により、費用の使用を大幅に縮小し、残高を返却した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三品　陽平 (Mishina Yohei) (00710849)	愛知県立芸術大学・音楽学部・准教授 (23902)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関